編集長から

ネットワークを考える

増田　一世

地域で活動していると，横のつながりの大切さを実感する．でもなかなか難しい．

今の社会で慢性的な疾患，難治性の疾患，あるいは何らかの障害を抱えると，地域社会の中で暮らしにくくなる．暮らしにくいという状況が起こった原因は人によってさまざまである．そして，さまざまなサービスや制度が作られているが，このサービスや制度が極めて縦割りに作られているのが現状で，不十分な場合が多い．しかし，縦割りの制度なので，生きづらさを実感している人たちが横につながっていきにくいという側面がある．

やどかりの里では，障害を持ちつつ生きている人たちの「体験発表会」を大切にしてきているが，その取り組みの中で障害の種別を越えた体験発表会をこれまで2回実施してきた．この取り組みの中で，互いのことをよく知らないことに気づかされた．車椅子で暮らしている人は，精神障害の人たちが長期間精神病院で暮らしている事実をほとんど知らなかったし，精神病院がどういうところなのかもご存じなかった．

一方で，身体に障害を持つ人たちが，1人暮らしを実現することがどれだけ大変なのか，電動車椅子を手に入れて，介助を求めずに動ける範囲が広がることへのわくわくした思い，雨降りに傘を差して電動車椅子で歩く喜びを教えてもらった．

この体験発表会を開催することで，自分の当たり前の暮らしが，当たり前ではないことを実感したし，ある日突然罹った病気がもとで体の自由や家族や仕事を失い，人生を立て直すまでにたくさんの時間が必要だったことも聞いた．

どこか生きづらさがあること，社会の中に問題を感じていることなど，たくさんの共通項があるが，それがともに歩むことにつながりにくい現実がある．例えば，支援費制度が導入され，さまざまな問題が起こっているが，精神障害の分野ではあまり大きな影響がないため，制度の不備に対する問題意識が深まりにくい．高齢者の介護保険の問題もしかりである．

しかし，私たちが今どのような社会に生きているのかの共通認識を持つことができれば，横のつながりを持つことの大切さが共通の課題になるはずである．実際は，制度が縦割りなので，制度に合わせたバラバラの動きになりやすい．

まさに，やどかりの里が活動するさいたま市の障害者団体やその関係者はバラバラな状況にある．これまで3つの市で独自でやっていたことが，合併によって急に1つになって人口規模も大きくなった．それぞれ独自の活動をしていた団体が，1つにまとまろうというところに無理がある．1人1人の人間が違うように，それぞれの団体の成り立ちも性格も違う．違いを尊重しつつも，それぞれの課題を持った人たちが出会い，対話を重ね，互いのことを少しずつでも知り合い，理解し合うことで，緩やかなネットワークを構築していかなくてはならない．自治体の規模が大きければ大きいほど，この緩やかなネットワークが，生きづらさを持つ人たちの暮らしを支えていく武器になっていくはずなのだ．